

交流協会 学生交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成24年2月5日から2月12日まで台湾の日本の人文社会科学研究（歴史・社会科学・経済・政治・外交・法学・商学・教育等）に関心のある大学生15名を現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために東京・長野に招聘しました。

訪日前には、日本の政治、外交、社会情勢等について2日間の集中講義を行うとともに、日本では早稲田大学における「戦後日本の台湾認識」と題する講義及び日台の学生による意見交換、発表、信州大学訪問、また、文化体験では、ホームステイ、茶道、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した15名のうち、男性2名女性4名の訪日報告書を2回にわけてご紹介致します。

本当の日本、初体験

国立高雄第一科技大学応用英語学部
王静儀

「お客様に連絡致します。当機はまもなく羽田国際空港に着陸致します。ご自身のお席にお戻り下さい。」

今朝、家を出る前に私は日本のジャニーズアイドルである大野智の最新ドラマ「もう誘拐なんてしない」を見ました。まさかその日の夕方にはその撮影現場にいるなんて信じられません！高等専門学校で日本語の勉強を始めてから3年ほどになりました。しかし日本の理解は本やドラマなどの偏った知識にすぎません。今、ようやく桜の国の本当の姿を目にし、その生活を実際に体験できるのです。ずっとこの時が来るのを待っていました。私は深く息を吸いこみました。まるでこれが白日夢のように感じられました。

飛行機を降りると、赤紫に染まった美しい夕焼けが私たちの到着を出迎えてくれ、とても嬉しかったです。初日の夜、私たちは新宿の竹庭（居酒屋）で現在流行している「女子会」を体験しま



した。レストランの内装は女性の好みに合わせてあり、メニューの多くは野菜と簡単なおつまみでした。これまで日本の飲酒文化は男性の一団が居酒屋で集まっている場面から進歩していないと思っていたのですが、現在は「女子会」以外にも、伝統的なイメージを変えるような、一緒にケーキを作る「男子会」があるそうです！

2月の東京は摂氏3度程度でしたが、空気が乾燥しており、台北のように湿った寒さではないので、私たちはすぐに適応できました。それにその日の夜には多くの日本の女性は寒さも恐れず、とても短いスカートと靴を履いて歩いているのを見ました。彼女たちの美意識にはとても感心しまし

た。その後私たちは24時間営業の一蘭ラーメン店へ行き、お客のニーズに合った日本のラーメンを実際に体験しました。注文は自動販売機のような食券機で行い、とても便利で、また素早く注文できました。特別だったのはどの席も個人的な空間になっていたことです。席の前にも簾がかかっていて、お客は何の邪魔も気にせずラーメンを食べることができます。これほどまでにお客の立場に立った考え方するなんて本当に気が利いています！トイレも完璧で、無休の関係からなのか、ウォシュレットやおむつ交換台だけでなく、一番クールだったのはトイレに20ロール近いトイレトーパーが置かれていました。とても面白く感じたのは、私がとても惜しい気持ちで最後のスープを飲み干したら、丼の底に「この一滴が最高の喜びです。」という字が現れ、客に対して感謝を表しているのです。最後の言葉は私を驚かせ、また嬉しくさせてくれました。

翌日、私たちは台湾大学生の代表として有名な学府一早稲田大学で日本の学生と交流を行い、その後一緒に深川江戸資料館を訪れました。私たちのテーマは「戦後日本の台湾理解」であり、その後の討論の中で日本側の考え方を理解できただけではなく、このテーマを通して互いに意見を出し合い、多くの考えを生み出しました。これは千載一遇の素晴らしい機会でした。交流が終了し、私たちは自由時間を利用して彼らと話しをしました。日本の学生生活から台湾のドラマの話まで色んな話しをし、その中で私たちの台湾ドラマは次第に日本の若者たちの間で旋風を巻き起こしていることを知りました。午後の江戸資料館では21世紀に生きる私たちが江戸時代の町並みへと足を踏み入れました。館内では文化的背景の資料や文献の他に最も私を魅了したのは当時の町並みの再現でした。一般的な住宅や商店、公共施設があり、どれも手に触れて体験することができるのです。道路に掛けられている布ですらその理由が

ちゃんと存在するのです。そのうちの一つの柄に鎌(かま)、輪(わ)、平仮名の(ぬ)を組み合わせたものがありました。それは「構わぬ」の意味を暗に含んでいるのです。

三日目の朝に私たちは国立国会図書館を参観しました。この訪問先を訪れる前、私は不思議に思っていました。図書館は図書館なのだから、一体1時間も何を見学するのだろうか、と。この国会図書館が驚きの連続だなんて思っても見ませんでした。地上4階地下8階の豊富な蔵書量以外に、先進的な設備、スタッフへ配慮した設計、細心の注意を払った保管方法がそこにはありました。例えば、オリジナル本の寿命を延ばすために、本の置き方を考慮しているだけでなく、温度と湿度は一年中一番良い状態に保たれていますし、書庫のライトも必要な時だけ点灯します。移動書架は学校のような手動ではなく電動でした。長時間地下で働くスタッフの精神ケアのため、まるで地上にいるかのように思わせる天井がある設計になっていました。最も驚かされたのは、台湾の図書館のように開架式でないことでした。利用者が本を借りたい場合、まるで病院で薬を受け取るかのように、先に申請表を記載しカウンターで受け付けられ、約15~20分後にベルトコンベアーで私の目の前まで本を運んでくれるのです。とても興味深かったです。

翌日、私たちは早起きをして善光寺へ行きました。ここは日本人が一生のうちに必ず訪れる宗教の聖地です。やはり、一歩足を踏み入るとその神聖な建築と景色に染まってしまいました。参道には多くの伝統が香る特色ある店が並んでいます。初めに私たちは本堂の前で一列に並び、腰を下ろして、住職が私たちに徳を分けてくれるのを待ちました。しかし、私の頭に急に落ちてきた数珠はとても重く、当時の私はとてもびっくりしました。靴を脱いで本堂へ進み、朝事を見ました。彼らの読むお経は全く異なったものでした。台湾

の不明瞭な読み方とは異なり、言葉一つ一つがはっきりと聞き取れました。その後、ご本尊の下にある真っ暗な道を進みました。その中には鍵があり、それはご本尊との縁を結ぶもので、極楽浄土への鍵です。道の様子も鍵の位置もわからず、通路内では叫び声が絶えず響き、みんなとても興奮し、緊張していました。最終的に多くの人が鍵を触ることが出来、満足のうちにこの意義深い戒壇巡りが終了しました。

長野の2日目、私たちは松代大本営の地下壕を見学しました。事前に歴史の教科書で防空壕の記述と世界大戦の遺跡に関して読んでいましたが、まさかその現場を訪れる日が来るとは思っても見ませんでした。本の中の温度の無い文字が全て目の前に現れ、一幕一幕の映像が頭に浮かび、その感覚はとても強烈でした。私たちはその混乱した年代には生きていませんが、日本のおかげで今日でも戦争の恐ろしさや当時の人々の生活の苦しみを感じることができます。日本が一生懸命に平和の重要性を伝えようとしていることに本当に感謝します。

「超巨大寒気団が日本に襲来し、各地の積雪は記録を更新し、長野県栄村では2.5mに達し、まるで住宅ほどの高さに迫ろうとしています。」

この旅行の一番の楽しみこそが長野県で体験する「雪」でした。長野へ行く途中に見えた真っ白な雪で覆われた山林はまるで甘い粉砂糖が降られたジンジャーブレッドを売る店に迷い込んだかの



ようでした。更に対比するかのように紺碧の空が広がり、このような光景が見られて本当に幸せでした。周りはどこも分厚い雪が積もり、かまくらを作り、雪合戦をし、そしてスキーの体験をした快感は忘れられません。初めてスキーを経験し、スキーブーツを履いたときはまるで足が石膏で固められたかのような感覚で、歩くのも困難でした。また山の上から滑り下りて来ると、遊園地のジェットコースターよりも刺激的で緊張しました。高速で滑り下りるときは、精神的な恐怖を克服し、バランスを保たなければなりません。初心者の私たちはあちこちで転びましたが、スキーが私たちにもたらした楽しさは全身の筋肉痛を忘れさせてくれました。

善光寺の宿坊を離れる前に、私たちに挨拶に来てくれた住職がこう言っていたのを覚えています。日本人の親切は下心があり、自分のためであり、本心からではない、と。そんな話を聞いていましたが、ホームステイで温かなもてなしを受けると完全に意識が変わりました。ホームステイ先のお父さん・お母さんは私たちを自分の娘のように接してくれて、私たちに多くの日本の生活習慣を紹介してくれました。また積極的に台湾がどのような国なのかを理解しようとしてくれました。知り合ってから帰国後まで、ずっと彼らの無償の世話を受けました。一緒にいた時間はたった1日半でしたが、とても深い感情を築き、離れる時には流れる涙を抑えることができませんでした。原稿を何も用意せずに話した最後の挨拶は上手く言えず少しイライラし、またとても可笑しかったです。台湾を離れ、日本に来る時に私は両親に「ってきます」と一言言っただけでした。まさかホームステイを体験して寂しさのあまり涙が止まらないなんて思いもしませんでした。なるほど、「田舎に泊まろう」という番組の中での感情の表れはまさに正真正銘本当の感情であり、番組的な効果ではないのですね。K₁夫婦の愛情と身に余るも



てなしを受け、本当に嬉しく、また驚きました。こんな貴重なチャンスを得られたことは本当に幸せです。遠くない将来、私は再度長野を訪れ、K₁夫婦とお会いしたいです。

最終日、私たちは特に早起きをして複雑な地下鉄に乗りました。朝5時には既に多くの人に乗っていました。そして多くの場所に地下鉄で行くことができ、とても便利でした。私たちはその日、築地市場へ行き、この世のグルメである刺身を食へに行きました。カウンターに座り、一貫一貫の寿司が寿司職人の手によって目の前に現れます。なんて素晴らしい美食の場所なのでしょう！他に、私がとても気に入っている日本の点は道を歩いても安心できることです。車が道を横断している人に割って入ることはありません。道路交通法によると、歩行者が絶対的に優先されるのです！

「萬巻の書を読むは萬里の道を行くに如かず」、この旅行は多くの驚きと感動に満ちあふれていました。これらの美しい思い出は決して本から得られるものではありません。ずっと随行してくれたSさん・Kさん・Hさん・T先生、本当にありがとうございました。あなたたちの手助けがなければ、私たちはこんなにも順調に、楽しく過ごすことは出来ませんでした。そして特に日本政府がこのようなチャンスを与えてくれたことに感謝します。私は本当の日本を理解することができました。訪日を経て刺激と啓発を受け、今後より積極

的に自分の日本語を上達させ、将来日本で造詣を深めようと思います。

無喧噪なビル群

政治大学中国文学科
黄奕寧

日本は無喧噪、無垢な国
それは何の感情も持たず、高い技術力を示すビルを建てる
しかし街には人に知られていない数多くの物語が埋もれている
所謂無喧噪とは、完全な静寂ではない

1. 出発

政治大学国際関係センターで授業を受けた二日間、台北は晴れ、そして翌日は雨でした。まるで出発前に多様に变化する台湾の気候を忘れないよう教えてくれているようです。「四度目の日本」。余るほどの興奮の他、今回は荷物の中に目一杯の冷静な気持ちを詰めてきました。

私たちは夕方五時に羽田空港へ到着しました。新宿までの道のりには整った道路と各種商店が見えました。六度の空の下、それらは余計に秩序あるように見えました。その日宿泊するサンルートホテルと新宿駅はたった三分の距離しかなく、多くのデパートが林立する他、あの有名な歌舞伎町にも近い場所で、私たちは東京の夜の生活を垣間みることができました。

新宿の町並みはとても奇妙でした。もしそれが東京都から独立した時空空間であったとしても言い過ぎではありません。人々は信号が変わると進む方向が変わり、道路の中央で交錯する瞬間、足を止めて人を観察する時間が一番楽しい、という荒木経惟の言葉を思い出しました。多くのビルの下で忙しそうにしている東京都民は一体何処へ行

くのでしょうか？私にとって日本の都市生活の底にある漠然とした、変化への不慣れな対応は探究する魅力となります。

2. 異なる地域/異なる自分

二日目の朝、早稲田大学へと行きました。若林正文教授の「戦後日本の台湾理解」に関する授業を受け、日台学生会議の学生と交流し、組毎に討論を行いました。最初にこの行程を知った時には少し緊張をしていました。自分の日本語がそのレベルに達しておらず、意見を伝えることができないのではないかと感じていたからです。しかし、日本の学生の多くが中国語の基礎を持っており、また台湾文化にも興味を持ち、その討論のプロセスは大いに盛り上がり、和やかな雰囲気でした。班ごとの討論で、私たちの班は、どのように日本の台湾に対する認識を強化するか、を主要な方向性とししました。目下台湾では多くの方法で日本の最新情報を得ることができます。台湾人は多くがテレビ番組の影響で、想像と理解が混在している部分は否めませんが、日本という国を既に良く知っています。しかし比較すると、日本人の台湾に対する認識はとても薄いものです。今回の討論を経て、私たちは台湾が多くの特色ある文化を持っているにも関わらず、最も有効的な方法で海外に広めてはいないことがよくわかりました。これは文化産業が考えねばならない課題であり、台湾が日本を手本として学ぶべき点であります。

今回の日本旅行は、幸運なことに多くの文化・教育に関連する団体や地域を見学しました。その中で日本は文化資産の保護や活用を相当重視していることがわかりました。私たちが国立国会図書館を参観したことが良い例です。国立国会図書館は日本で唯一の国立図書館であり、日本国内で出版された全ての出版物がここに送られ保存されます。そして類別毎や年代毎に保管され、利用者に完璧で便利な情報検索閲覧システムを提供してい

ます。図書を管理する行政組織全体の規模から見ると、日本政府は文化政策の推進に対して多くの力を注いでいるようです。

私たちは常に偶発的な縁で異国文化に対して興味や好意を抱きます。意識を介入させる必要が無い最初の感覚は往々にして後の調査への最大の動機となっていきます。今回、日本の大学生と交流し、私は異郷の地で人と人の間、文化と文化の間に情報が飛び交う中に自分たちの影を顧みることができました。

3. 微かな光

長野での研修部分は今回の重要なポイントです。長野と東京の間は約四時間ほどかかります。景色の変遷により都市と地方の強烈な対比を感じました。ビルによって切り取られた空から何処までも広がる地平線へと変わって行きました。私たちはその晩宿泊する善光寺の徳行坊へと到着しました。私は徳行坊の近くにある風情香る町並みが大好きです。特に夕方の時分には一つ一つ淡い黄色の街頭が雪の積もった石畳を照らしていました。雑貨店の雑然としたショーケースには白髪まじりのおじいさんの背中が映っていました。その光景は宮崎駿の映画に出てくるような一場面でした。

翌日の早朝、雪が舞い降る中、私たちはまだ明けきっていない空の下、善光寺へ参拝に行きました。そして朝食に一人の和尚が挨拶に来てくれました。

「・・・あなたたちが日本語を学んでくれたこと、日本を理解し、日本人と交流しようとしてくれることに感謝します。」確か、こうおっしゃったと思います。日本人は容易に個人の感情を表に現さない民族です。しかし、もし私たちが心を開いて文化の差を許容できれば、相手もそれを感じてくれるのだと思います。「どうかみなさん、この心をもって周りの人々に気を配ってあげて下さ

い」。これは簡単な言葉ですが、とても重要な知識が詰まった言葉であり、私はこれに感謝したいと思います。

善光寺を離れ、私たちは続けざまに信州大学と松代地区を訪れました。その途中には途切れることなく山々が続く景色が広がり、栗色の地表にまるでクリームのような雪が覆っていました。遠くから見るとまるでモンブランのようです。その日の午後、旧樋口家で行った和服と茶道の体験はとても特別なものでした。しゃべりすぎなお母さんたちに取り囲まれ、腰をきつく締められました。気まずくもあり、可笑しくもありました。しかし和服を着ると昔の日本女性がなぜゆったりと歩いているのかがわかりました。お茶を飲むだけでも容易なことではありません！初めて茶道の師範が目の前で厳格で細やかなお手前を披露してくれるのを見ました。一方でとても不思議に思いました。「お茶を飲む」行為は生活の中でのリラクゼーションであるはずですが、日本人の手にかかれば粋を集めた重要な文化へと昇華してしまうのです。

4. 白銀の丘

私たちが素朴な城下町を後にすると、バスは飯綱高原へと向かい、轍と共に白銀の山へと分け入りました。

飯綱はまるで永遠に崩落することない白い城のようでした。枝や葉は粉状の結晶に覆われており、微かな風が吹いただけで木の下ではかさこそと雪が舞います。飯綱の冷たく、晴れた天気が私は好きでした。新宿の町並みのあの漠然とした順応し難い温度と比べると、ここの太陽の光は激しく人の心を動かします。一つ一つ力を込めて柔らかな地面に足跡をつけるのは楽しく、その後雪が舞い降り、その跡を消して行く様子を楽しみました。

スキー体験は私たちがこの数日間で一番期待し

ていたものの一つです。飯綱高原スキー場の敷地はとても広く、現場に到着するとスキーウェアに身を包んだ多くのスキー客が白い山の上から自由自在に滑り降りてくるのが見えました。全ての装備が整い、コーチは私たちにウォーミングアップをさせ、すぐにリフトに乗り、斜面の上へと上がり練習の成果を試しました。最初身体のバランスがとれず、何度も転んでしまいましたが、何度か失敗するとコツを掴み、達成感が湧いてきました。台湾は気候と地形に制限があり、スキーと接する機会はほとんどありません。コーチの細かな指導は言うまでもありませんが、今回この研修のおかげで身を以てスキーの楽しさと魅力を感じることが出来ました。私にとって忘れ難い思い出です。

川端康成の『雪国』の中で、主人公が列車に乗って雪国へと向かう場面があります。ガラス窓には現実とその逃避とが交錯した意識が映り、時空の流動によりそれが具体化するのです。あの時の飯綱高原の景色は私にその一幕を思い出させました。

5. 太陽の方角

飯綱に泊まった二日目の朝、私たちは芋井地区へ行き、ホームステイ先のお父さんとお母さんと出会いました。現地住民の方々はとても熱烈に、そして盛大に歓迎会を開いてくれて、私たちにかまくら作りや餅つき等の農家活動を体験させてくれました。そして昼食を共にし、一緒に作ったお餅を堪能しました。ほとんどが年配のおじいさんやおばあさんでしたが、とても元気で、嬉しそうに私たちに長野の人や事、物について話してくれました。彼らの温かさを十分に感じ取り、またこの土地で育った人たちはとても長野のことを誇りに思っているのだと気づきました。

歓迎会后、私と Jenny は K₁ 一家にお世話になりました。玄関を入るとそこにはもう温かそうなスリッパが二足、居間にはたくさんのお菓子が用

意されていました。K₁家はちょうど日の当たる斜面に建っていて、庭からは山林の美しい景観が一望できました。K₁のお父さんはこれは毎日見ても飽きない風景だ、とおっしゃっていました。

その日は夜になると外は特に冷え込みました。しかし屋内にいた私たちは普通の日本人家庭のように、お酒を飲み、テレビを見たり、今日あったことをおしゃべりしたりしていました。そして世界で一番素晴らしいこたつと夕食を楽しんでいました。「普通こそが幸せなんだ」という言葉は恐らくこういう事を言うのだ、と考えていました。最も忘れ難いのは長野を去る朝、K₁のお父さんが私たちに彼の写生作品をプレゼントしてくれたことです。そして長野の四季の美しさを教えてくれました。どの絵にも違った物語がありました。

私は長野の雪景色を台湾に持って帰りたかったです。

短い一晩のホームステイ生活でしたが、台湾から来た私たちにはここで最も特別で、最も温かい人たちと出会いました。しかし本当に不思議なのは出会いではなく、別れです。多くの人が日本人は近づき難い民族だと考えています。しかしこの日を境に私は誠意を持って接すればきっとお互いの心は通じあうのだと考えるようになりました。人と人のように、文化と文化もまた然りです。

6. 無喧噪

一週間以上のウィンターキャンプにも句点を打たなければなりません。しかし私にとって、本当の「理解」はまだ始まったばかりです。日本、工業大国の風格から曖昧な国民性まで、精緻な商品から輓歌的な芸術観まで、どの段階に於いても私にとってとても魅力があります。それらの間には衝突が生じますが、そのどれを除いても本当の日本とは言えないのです。

去年応募したウィンターキャンプですが、私は日本の流行音楽産業の美学再構築というテーマで

研究計画書を書きました。社会学とコミュニケーション学の観点から、日本が大衆文化を急速に発展させてからの流行音楽の歴史的軌跡の形成を分析しました。言い換えれば、傍観者の角度から日本の「声」に耳を傾けていたのです。いつの間からは忘れましたが、私はこのような方法で、音の中から私の考える日本のイメージを探すのです。恐らく息も絶え絶えの不安定さとその雰囲気は却って魅力的なのかもしれません。

新宿には新宿の音があり、長野には長野の音がありました。それらの清らかな姿の底に言葉を発さず、裂け目に身を隠している歴史が消えずに残っているのです。高い技術を象徴しているビルの下で、大和文化を代表する桜や武士道以外にも多くの言葉を失った記憶があるのです。

所謂無喧噪とは静寂ではないのです。

7. 後記

忙しく充実していた八日間の日程が終わりました。多方面から日本を理解できただけでなく、同時に他国の文化を理解する前に、まず自分たちの文化の含意を学ばなければならぬと感じ取りました。これまで海外の生活に憧れていましたが、日本に来てから異文化の衝撃に遭ったことで、もう一度振り返り、自分の土地を顧みると、多くの違った観点が生まれ、自分自身がまだ完全に台湾を理解できていないことに気づきました。

私は台湾で生まれ育ったことに感激しています。

距離は美しさを生む、という言葉があります。地理的、文化的に見ても、台湾は日本に最も近い国です。しかし息苦しい圧迫感を感じます。二時間半のフライトで、私たちは多くの予想もできない可能性と繋がるのです。それぞれの色濃い文化の実情を通して、お互いが興味を持ち理解する視野を養うのです。それこそが一番理想的な距離なのだと思えます。

活動報告を書くことで、私は訪日した一週間の記憶を再度整理することが出来ました。書いている間、私は報告書がただの旅行紀になるのではないかと心配でした。一度修正すると、意識の流れ的な語調が混じってしまいます。しかし、漠然とした叙述は私にとってはとても重要なものなのです。大学生活最後の一年の完璧な紀行文として、書き終えた時は万感の思いでした。

旅行中の十四名の仲間たち、T先生、Hさん、Sさん、Kさん、本当にありがとうございました。

あなたたちとこの時に出会え、今後の私の成長を促してくれたことに感謝します。



信州善光寺通り



芋井伝統舞踊「獅子舞」

「日本研究支援 2012 年ウィンターキャンプ」

中興大学外国語学部

陳怡文

「出発前」

私が生まれた「屏東」は台湾で一番南に位置する県であり、避寒地である「墾丁」もここにあります。屏東は一年中夏のように、年平均気温は24～25度、最も暑い月の平均気温は30度以上にもなります。一番寒い月の平均気温ですら18度程度です。つまり寒さが一体どんなものなのかもわからない「温かい国」なのです。ですから私が2月に日本へ行くと話すと（ちょうどニュースで東京の大雪について報道されていた）、特に今回の日程の中にスキー研修が入っていることを知ると、私に参加資格を放棄するようという意見が次々と雨後の筍のように出てきました。しかし冬に生まれた私は寒さを恐れませんが、一日一日と日本へ出発する日を数えていました。

「初めての日本」

日本と台湾の距離はとても近く、それゆえ台湾から日本を訪れる人数も相当な数になるのです。日本政府観光局（JNTO）の統計によると、2008年には2300万人の台湾全人口のうち約1/16の人が日本を訪れているのです¹。

飛行機は国土の延長、と言った人がいます。私はANAの飛行機の中で既に濃密な日本の香りを感じることができました。それは機内食です。私が乗ったことのある飛行機の中で日系航空会社の機内食は他の航空会社よりも比較にならないほど美味しかったです。

日本に到着後、「気温は確かに低い」と感じましたが、空気が乾燥している関係からかとても過ごしやすい気候でした。到着したその日の夜（2/

5) は居酒屋(竹庭)でOLの間で流行っている野菜料理を堪能しました。ここは「飲み放題」で、団員たちはアルコールの作用もあって、とても仲良くなりました。(ついでに書いておくと、団長は3杯お酒を飲むととても饒舌になりました。)

「大学・国会・資料館」

2日目(2/6)団員たちは日本の4大私立大学「早慶同立(2)」の中でも多くの文学家を育てた「早稲田大学」を訪れました。そしてそこで幸運にも若林正文教授の「戦後の日台関係」に関する講義を聴くことができました。その後、講義の内容について、日本の大学生と討論した経験は忘れられません。

続いて、3日目(2/7)には日本の国会図書館を見学しました。解説員は埃避けの靴カバーを履くように言うと、私たちを地下8階、深さ30mもある蔵書空間へと連れて行ってくれました。ここで私たちは年代の古い昭和の漫画やもう使われることのない電車の時刻表等を見ました。日本の国会図書館は書籍を「保存文化財」であり、日本の重要な国の宝なのだと考えています。つまり日本政府はそれらを完全な形で保存し収蔵する責任があるのです。館内の1階には利用者が資料をコピーしたり、本を受け取る場所がありました。もし私が日本で研究をする日が訪れれば、恐らくこの蔵書やコピーに相当頼るのだと思います。2階では日本の新聞を利用者に提供しています。ミクロ版で製本された新聞もあり、それらが整然と本棚に納まっています。ここから日本人の整理や収納に長けた特質を見ることができ、この点はとても感心しました。

昼食後、私たちは「深川江戸資料館」へ行きました。ここで江戸時代を模した古い町並みを見学し、Sさんの詳しい解説を聞きながら、江戸庶民の無駄遣いしない精神に驚嘆しました。一枚の服は大人が着て、子供が着て、雑巾になって、最後

には燃やされ、その灰が肥料になったり、道路敷設に使われたりしたのです。小さい頃から恵まれた環境で育った私たち都市の子供は自分たちの無駄遣いを悔いて、暗に今後は食事も食べ残すことがないように決めました。ついでに書いておくと、その日の夜、私たちは善光寺の宿坊で精進料理を頂きました。日程の中で私が食べた日本料理は毎食とても美味しく、台湾の夜市の料理を忘れてしまうほどでした(台湾の友人に言わせると許されない行為だそうです)。台湾に戻ると体重計は留まること無く高い数値を指していました。美食は女性にとって大敵ですね。。。

「法要・住職の『思いやり』」

4日目(2/8)早朝の日程はとても印象深いものでした。まず私たちは早起きをして善光寺で朝事と戒壇巡りに参加しました。早朝の寒さは足の先が凍えるようで感覚はありませんでした。ただ岸に上げられた魚のように飛び跳ねるしかありません。それにより血液の循環を良くしたのです。早朝の寒さ以外に朝事に参加できたことはとても得難い経験でした。朝事はたった10分程度で終わりましたが、団員にとっては寺の本堂の中で正座していると、足はあつという間に痺れ、寒さで感覚がなくなった両足をずっと揉みながら静寂を破る読経の声を聞いているのでした。時間の流れとともに、身を切るような寒さは僧侶の低い読経の声に覆われ、本堂の中には気持ちが穏やかになる雰囲気満ちていました。その後の戒壇巡りは実際真っ暗で、手を伸ばしても見えない状態の中をみんなで寄り添いながら(何に興奮していたかわかりませんが)、前へとゆっくり進みました。残念だったのは最後まで私は「極楽世界へ通じる錠前」に触ることは出来なかったことです。仕方ありません、また後日善光寺を訪れることにしましょう。

団員たちは宿坊に戻り、朝食を食べました。す

ると善光寺の僧侶が来られ、団員たちの前でとても印象深い話をして下さいました。それは日本人が他人に親切にするのは、それは自分に利益があるから行うのだ」「日本人のようにならないで下さい」「本当の親切はとても難しいのです」等々の言葉です。この事は私の大学時代を思い出させました。いつも他人に対して優しく接しようとしていたり、他人に対して私の好意を感じさせようとしていました。それらは自分のために行っていたのです。和尚が言うように、このような優しさは利害であり、身勝手なもので、時にはそれに気づかない場合もあります。この時私は初めて俗世間を離れた人、つまり僧侶と私のような世俗に塗れた人との違いを感じました。この話の中から私は多くの考えを得ることができました。例えば、日本文化が重んじていることは「他人の感情を読み、相手のために思い、最後まで細やかで丁寧な対応をする」(だから多くの礼儀に関する書籍がある)だと思います。しかし、和尚の視点から見ると、これらは矯正されたものなのです。最後には礼儀は一種の形式でしかなくなり、心の底からの『思いやり』ではないのです。この言葉を聞いて、私は堪らず「日本は確かに心遣いが細やかな国です。『どこでも他人の立場に立って物事が考えられています。自己満足で人に対して親切を行ってはいけないのだと私は自分自身を戒めなければ。』これは自分にとって相当厳しい考え方だけれども、日本人も常に他人のために考えるのではなく、時には自分ためを考えてもいいのでは」、とってしまいました。

「善光寺・信州大学・松代城下」

朝食後は善光寺を見学し、その後信州大学を訪れました。団員たちは日暮し庵で昼食を食べると、松代城下内にある真田宝物館・樋口邸・真田邸・文武学校などを見学しました。その途中で和服と茶道の体験を行いました。その日の日程はと

ても充実していました。日本の歴史や文化の知識が大幅に増えただけでなく、和服や茶道の文化体験により多くの美しい写真も手に入れられ、今後お見合いする時には悩まなくて済みそうです。

「地下壕・雪国とかまくら」

5日目(2/9)私たちは地下壕を見学しました。そこでは秀英高校の学生が戦争発生時のこの壕の用途やこの地に集められた日韓青年の友情について分かりやすく紹介してくれました。もしかすると戦争はとても簡単に種族間の隔たりを忘れさせ、心の底から外国人と友達になれるのかもしれない。

松代荘で昼食を食べた後、私たちは飯綱高原でスキー体験を行いました。「人生で初めてのスキー！」だった上に、自分の運動神経の悪さもあって、とてもひどく転びました。たった数時間の体験でしたが、とても印象に残りました。

アゼリア飯綱へ戻った私たちは夕食後優しいスタッフの方々が私たちのためにかまくらを作ってくれたと聞きました。(とても感動しました!)。私はこの場を利用して彼に感謝したいと思います。しかし彼の名前がわからず、ただ団員の中のあだ名である「灯さん」としか覚えていませんでした。

「機会があれば、必ず冬の長野を再訪する」、と私は心の中で決めました。そんな日が訪れればス



キー体験だけでなく、芋井地区のお父さんとお母さんを訪ねてみたいです。

「お父さん・お母さん、おやきと手作りの蕎麦」

6日目(2/10)ホテルを出発し芋井小学校へ行き、歓迎会に参加しました。そこで私たちのかわいいお父さんとお母さん—H₁夫妻に出会いました。お二人はとても明るく優しいご夫婦でした！簡単な自己紹介の後、みんなで一緒に現地の伝統舞踊を踊り、獅子舞を見ました。続いてその日の昼食である「お餅とこねつけ」を作り始めました。とても忙しそうで、みんな出たり入ったり。団員たちも手伝いました。最後にはつまみ食いをも手伝いました（でも本当に美味しかったんです！）。

恐らく私たちが昼間十分に餅つきに参加できなかったため、ホームステイ先に到着するとお父さんは10年以上もの経験をもつ蕎麦屋の友達を家に招き、自分たちでその日の夕食を作りました（太く切りすぎてもう少しで蕎麦がのどに詰まりそうでした）。農家同士の助け合いの感覚はとても温かく、芋井地区のみんなはとても仲が良さそうでした。

ホームステイ先に着くとすぐにお母さんが手編みのマフラーをプレゼントしてくれました。とっても暖かく、気持ちまで温くなりました。お父さんもお母さんも手先がとても器用な人でした。お父さんの職業は「大工さん」で、お父さんが作ったパズルをプレゼントしてくれました。お母さんも負けるとも劣らず、料理も編み物もとても上手でした。この文章を書いているとお母さんの料理が懐かしくなってきました。「おふくろの味ですね。」（笑）

金曜日にホームステイをしたおかげで、私たちは幸運にも週末に戻って来る娘さんご一家に会うことが出来ました。お父さんお母さんの3人のお孫さんはとっても可愛かったです！みんな優しく、家事を手伝っていました。翌日はお母さんの

手作り愛情朝食を食べ、2人の孫娘と一緒に戸隠神社へ参拝に行きました。

「一緒にいる時間はとても短く、一瞬で終わったかのように感じました。これは天が授けてくれた楽しい時間だったのでしょう」。歓送会では茫然自失という感じでした。

「感謝の気持ち」

今回のウィンターキャンプに参加でき、本当に嬉しく、また光栄でした。私に成長を促す考え方や原動力（例えば自分の下手な日本語をより上達させなければならぬ）を与えてくれました。そして交流協会が台湾の高校生・大学生・大学院生にこのような日本を深く理解できる機会を与えていることに感謝します。

交流協会のKさん、通訳のSさん、交流協会高雄事務所のHさん、そして私たちの団長であるT先生がずっと面倒を見てくれ、随行してくれたことに感謝します。そして団員たち同士の助け合いや優しさに感謝します。台湾に戻ってもずっと連絡を取り合いましょう。この活動に関わった全ての人たちに感謝します。ありがとう！ありがとうございます！

*1 日本の観光統計概要 http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism_data/index.html

